

戦後社会教育における若者の「たまり場」論に関する考察

安藤 耕己

A Study on the theories of the “Tamari-ba” in the Community Education for the youth in the Post War Period

Koki ANDO

Abstract

The purpose of this paper is to clarify viewpoints in theories of the “Tamari-ba” in the Community Education for the youth in the Post war Period. As a result of having analyzed various discourses on “Tamari-ba”, it is as follows.

From the end of the war to the 1950s, “Tamari-ba” meant a kind of relationships which existed commonly in our daily life. And some scholars recognized that they had educational effects for the youth.

In the mid-1970s, “Tamari-ba” was thought to have lost. So, many actions which aimed to reproduce “Tamari-ba” appeared. From the mid-1970s to mid-1980s, “Tamari-ba” facilities which aimed to produce a closely relationship among youth appeared.

From the mid-1980s, however, theories of the “Tamari-ba” disappeared in the Community Education for the youth.

Key words : Tamari-ba, community education for youth, Young-men's association, a public hall

キーワード : たまり場、社会教育における青年期教育、青年団、公民館

はじめに

筆者はこれまでに、戦後における地域青年団の実態とその活動の意義に関して、日常性と当事者の視点に立脚して検討を加えてきた¹。その一連の検討を通し、「たまり場」という語が、主に青年期教育の実践と関わってキーワードとして用いられてきたことに気づかされてきた。特に「たまり場」をめぐる議論と実践が展開されたのは1970年代半ばより80年代にかけての時期であったが、その時代に建設された若者の「たまり場」施設空間の限界性に関しても筆者は事例研究から考察を加えてきており²、今後の研究課題として「たまり場」を標榜した実践に関わった当事者からみた、「たまり場」の意義に関して質的に分析していくことを念頭に置いている。

本稿はこれらの研究を進めるにあたって、戦後社会教育における「たまり場」に関わる議論を整理し、その視点およびその推移を明らかにすることを課題とする。

青年期教育と「たまり場」という語の関わりに関しては、公民館・社会教育施設論の立場から平林正夫が1980年代半ばに整理を試みている³が、筆者がこれまで断片的に論じてきた青年団と「たまり場」との関わりを含め、戦後の「たまり場」論の展開に関しては総合的に整理されているとはいえない。

ゆえに、以下、研究の対象時期としては終戦後から「たまり場」論が展開した1970年代半ばから80年代はじめにかけての時期を主たる対象とし、社会教育に関わる雑誌論文や著書等を用

いて⁴、上記の課題を明らかにしていきたい。

1. 終戦直後から共同学習論展開期までの「たまり場」への着目

(1) 寺中作雄の初期公民館論

70年代以降の都市公民館論においてよく引用されるのが、戦後初期公民館論の提唱者として知られる、寺中作雄著の『公民館の建設』〔公民館協会、1946〕の一節である（下線筆者。旧字体は新字体に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた）。

われわれは熱望する。

お互の教養を励み、文化を進め、心のオアシスとなってわれわれを育む適当な場所と施設が欲しい。郷土の交友和楽を培う文化センターとしての施設を心から求めている。みんなが気を合わせて働いたり楽しんだりする為の溜り場の施設が必要だ。そんな施設が各自の生活の本拠である郷土、われわれの愛する町村に一つ宛出来たら何と素晴らしいことであろう。

〔前掲寺中 1946、p.13〕

このように寺中は、「溜り場」としての公民館に関して言及をしているのであるが、実は本文では一回しか「溜り場」の語は出てこない。その後、公民館論において「たまり場」という語が表出するのは、後述する三多摩テーゼ〔1974〕においてである。こうしてみると、初期公民館構想を再評価し、「たまり場」としての公民館を標榜する1970年代以降の議論において、寺中が「溜り場」と記述したことが針小棒大に評価された観もある。この点には留意が必要であるが、いずれ寺中の示した初期公民館像は後年現れる公民館における「たまり場」空間の原像として意識されるものである。

(2) 小集団学習の展開と「たまり場」の「発見」

さて、実際に「たまり場」という語が実践のキーワードとして用いられたのは、1950年代半ばの共同学習論の展開期に始まる。大田堯は浦和市西堀青年学級「ロハ台」のグループとの実

践から「たまり場」の意義に気づき、それをサークルにおける学習論の中で論じた。

大田は、「農村のサークル活動」〔大田堯編『農村のサークル活動』農山漁村文化協会、1956〕の中で、以下のような「村のたまり場」をサークルの前史としてとりあげた（下線筆者）。

どんな部落にも、若い衆たち、おかみさんたち、あるいは、おやじさんたちの“たまり場”があるものです。その場所は、氏神さまの石段の片すみだったり、橋げたの一角で、年中材木がつみあげてある上だったり、駄菓子屋の店先の茶飲台だったり、ビッコの椅子がころがり、チビた机がちらかっている一パイ飲屋だったり、あるいは小川のほとりの洗濯場であったりするので。そこでは、家の中では、お互いにむっつりとしていて、ろくに言葉をかわさない親子でも、PTAの集りで一度も口を割ったことのない母ちゃん、公民館の集りで、神妙なよそゆきの顔でかしまる親父さんも、身体中のこわばりをすっかりほぐして、見ちがえるような明るさをとりもどすのです。駄ジャレがパチパチと飛びかい、歓声がどっとおこります。（中略）

このたまり場は、誰からか与えられたところではなく、農民が自分たちでつくり出し、かちとってきた自由な空間なのです。（中略）

しかし、たまり場は、一方からいうと、あくまで行きどまりのたまり場でした。歴史的な大事件と直接につながらない袋小路にあったわけでしょう。部落部落のたまり場は、それぞれに孤立していて、何のつながりもありませんでした。たまり場ではくらしの苦悩も語り合われました。しかしその大部分が、ウップンばらしでおわったこともたしかでしょう。だからといって、それが水泡のようにあわく、はかないものにすぎないかといえば、必ずしもそういいきれないものがあるとおもいます。（中略）

長い間、陽の目を見なかった村々のたまり場も、行きどまりであることをやめて、歴史の舞台に堂々と姿をあらわすような日が、近づいてきているのではないのでしょうか。〔大田 pp.228-233〕

大田は上記のように、通時代的に不定型ながらも日常の中に存在する人と人との関係性を、当事者の立場から肯定的にとらえ、小集団による話し合い学習—1950年代半ば以降に理論化され、共同学習と呼ばれていた—の基盤・前提として着目したのであった。1960年前後の概論・ハンドブックには大田の『農村のサークル活動』が文中で多く触れられたり、参考・引用文献として挙げられており⁵、ロハ台の実践記録とともに「たまり場」の語が当時の研究者や実践家の目にとまったはずである。

たとえば、共同学習の主要な理論提唱者であった吉田昇の「共同学習のすすめ方」〔吉田昇・福尾武彦・碓井雅久・小川利夫『青年の学習活動』農山漁村文化協会1959〕では、以下のように「うさばらし」の必要性が強調される（下線筆者）。

共同学習という、みんなで話しあってすすめる学習の基礎には、うさばらしの気持が強いささえとなっている。

こうしたうさばらしの要素を軽くみすぎることは、たいへんなまちがいだ。話しあいがおもしろくなければ、みんなが出なくなってしまう。たとえ義理で集まったところで、話は堅苦しいよそ行きのものになってしまう。よそ行きの話からは、ひとびとの生活を高めてゆくエネルギーは生まれない。共同学習の指導者は、あくまでも、あせてはいけない。

だから、話しあい学習に、自由なふんい気をいれるために、世話役の人はいろいろな苦勞をする必要がある。

〔前掲吉田 1959、pp.52-54〕

同文中には大田の『農村のサークル活動』に関わる記述が頻出し、当然のことながら吉田が

その内容を踏まえていることがうかがわれる。先に挙げた大田のいう「ウップンばらし」の場である「たまり場」と吉田のいう「うさばらし」の場はほぼ同様の指摘とみていいであろうが、「たまり場」という言葉は用いられていない。他に大田論を引用・参照している論者も同様である。

共同学習論の提唱期である1950年代半ばから60年代初めにかけて、小集団学習の実践に深く関わっていた大田によって、若者たちの置かれる日常生活、日常意識が理解された。すなわち密接かつフランクな関係性としての「たまり場」が小集団学習の前提として日常から「発見」され、その重要性が認識されていったのである。とはいえ、上述のように「たまり場」という語は、その後、特にシンボリックに用いられてはいない。

というのも、この大田の「たまり場」に関する言及は、1970年代半ば以降の「たまり場」論頻出の時期にも主な論者からも取り上げられていないのである。管見の限り、後述する国立市公民館での実践に関わった長浜功が1980年代初めに評価している⁶のみである。このことに関しては、大田が1960年代以降は社会教育の場で発言することが減少し、後年の社会教育研究者の視野から消えていたことも一因かと思われる⁷。

2. 共同学習の停滞と「たまり場」—1960年代から70年代における青年期教育—

次に1960年代に目を向けてみると、「たまり場」を標榜する論考や実践に関する報告は数少ない⁸（【表1】参照）。これは、上に述べたように、あえて「たまり場」という語を用いずとも、密接かつフランクな関係性が日常に存在し、一般的に理解される状況であったがゆえであろう。さらには安保闘争と高度経済成長の時期であり、仲間による話し合いを重視した共同学習の「身近主義」には限界がとえられ、ナショナルなレベルでの経済と政治の問題を学習課題とすべく、農民大学運動が展開しようとし

ていた時期であった。その時期に身近な「たまり場」という語がキーワードとして実践や実践を巡る議論の前面に表出することは論理的にあり得ないことであった。このことに関わって、大橋健策は、科学的・体系的学習の必要性の中で公民館論においても「たまり場」が消えたことを指摘している⁹。

さらに当時、1960年前後の日本青年団協議会（以後、日青協とする）をめぐる議論においても、主体性派によって提起された、青年団の結合原理を「素朴な結合要求」に求める「青年団多目的論」を掲げた運動方針への批判も展開していたのである¹⁰。

以上のような時代相の中、1960年代から70年代前半までは「たまり場」は社会教育の理論上も実践上からも消えたと言ってもよい。

3. 1970年代半ばにおける「たまり場」論の展開(1)―都市公民館と「たまり場」―

そして、冒頭に述べたように、1970年代半ば以降、青年期教育において「たまり場」が論じられるようになっていくが、同時期に都市公民館における実践論と青年団の学習論という二つのトラックで論が表出していく。まずは前者、都市公民館における実践論の展開を概観してみる。

(1) 都市公民館における「たまり場」論の提起

寺中作雄の戦後初期公民館論において示された、「溜り場」としての公民館像を踏まえ、1960年代の都市公民館論の延長線上に示されたのが「新しい公民館像をめざして」〔東京都教育庁社会教育部、1974〕であり、いわゆる「三多摩テーゼ」として知られる。これは東京三多摩地域の公民館実践を踏まえ、構築されたものであった。

その中で公民館の4つの役割の最初の項として「公民館は住民の自由なたまり場です」とあり、「つまり、ひとりぼっちで、行き場のない人間でもそこに来れば、楽しく、理屈でない時がすごせ、さらには学習に参加したり、グループに加入できるキッカケをつかめるような、自

由なたまり場、自己解放の場として公民館があるのです¹¹と「たまり場」としての公民館の位置づけがなされている。

以後、実際に「たまり場」を前面に出した実践は、国立市公民館で展開されていったのであった。

(2) 国立市公民館における「たまり場」の提起

既に60年代から国立市公民館では青年室が青年の自主運営によって使用され、夜間にも自由に使うことが出来るようになっていたとい¹²、勤労青年層の継続的な利用形態が確立されていたと考えられる。この国立市公民館では、1975年より青年室を「たまり場」とした定例会が毎月第3金曜日に開始され、その集まりを「コーヒーハウス」と呼んでいた¹³。以後、その集まりは館外での活動にも展開し、障害者青年学級、さらには障害者と一般の青年の協働による喫茶コーナーの運営にまで至り、現在まで続いている。この実践に関しては、1976年以降、国立市公民館職員であった平林正夫によって報告されていく¹⁴。

その後、平林は「『たまり場考』―社会教育における空間論的視点」〔長浜功編『現代社会教育の課題と展望』明石書店、1986〕において、それまでの国立市公民館の実践をふりかえりつつ、社会教育施設における「たまり場」空間の理論的検討を行う。平林は寺中作雄の初期公民館構想に見られる住民の「溜り場」としての公民館の位置づけが、70年代における公民館の性格論へと継続しているとの認識に立ち、国立市公民館における青年による「コーヒーハウス」の実践を通して、「たまり場」の理論化を図った。平林は、「たまり場空間というのは、自然発生的に生まれた、ある程度、固定化されたメンバーの閉ざされた空間（テリトリー）であり、その場では一般社会論的価値から自由な価値、あるいは掙をもつことができる場、と考えられる」〔平林 1986、p.158〕とした。

そのような性格を持つ「たまり場」を生成していく仕掛けに関して、平林は、いわば「意図的な無意図性」といえる職員の関わり方、

さらには施設ハード面のあり方に関しても提言を行っている。しかし一方、平林による上述の定義は、「たまり場」は、一面として他者から見ると排他的な性格を持つことが暗喩されている。このことは実際に「たまり場」施設の問題として認識されていくこととなる¹⁵。

以後、国立市公民館を事例とした平林らの報告と論考が80年代まで続く。

4. 1970年代半ばにおける「たまり場」論の展開(2)―青年団と「たまり場」―

1970年代半ば以降、青年期教育と「たまり場」との関連が論じられるようになっていくときのもう一つのトラックが、青年団の学習論に関わるものである。

その時期より全国で青年団の再建や再編の動きが顕著となり、70年代半ばより80年代はじめは、「青年団第二の高揚期」と評価される¹⁶。

この時期には那須野隆一により『青年団論』〔日本青年館、1976〕が刊行された。そこでは名古屋サークル連絡協議会（名サ連）の実践をもととした「生活集団」論が提起され、その実現のために「たまり場」での生活史学習が提起された。なお、那須野の「たまり場」は歴史的イメージとしての宿泊型「若者宿」像を原像として描かれている。この視点は日本青年団協議会編・発行のテキストである、『青年団強化の手引 続ビジョンを求めて』〔1978〕において強化され、「若者組＝生活集団」「若者宿＝たまり場」というイメージの結びつきが示されたのであった¹⁷。

1970年代半ば以降、那須野以下、名古屋を事例とする報告や論考が提起される【表1参照】。そして日青協は『青年団論』を受け、「たまり場学習」を提起した。この「たまり場学習」に関して、1978年に刊行された『青年論潮』創刊号〔日本青年団協議会〕中、「たまり場学習を進めよう」を手がかりにその内容を見てみたい。

たまり場学習の意味

“たまり場”とは一団員のだれでも気軽

に寄り集まれて“本音を語る”ことのできる場、“自分を出す”ことができる場です。公民館や喫茶店、個人の家にいたるまで、いつでも自由に青年たちが集まれる“たまり場”の形はさまざまでも、青年団の日常活動の拠点となるところです。つまり、“たまり場”での話し合いは、正規の学習会や研修会にたちむかう青年たちの問題意識や学習意欲をつちかうと同時に、正規の学習会や研修会で学んだことを青年たちの行き方の指針や道標にまでつくりあげていく役割をはたしています。（那須野隆一氏―青年団の運動と学習―組織対策特別委員会まとめより）

“たまり場学習”とは、たまりばにおいて、団員の“生活と人格のまるごとのふれあい”をおこないながら、よもやま話しながら、系統的な学習にいたるまでさまざまな形でおこなわれる学習活動をいいます。

〔『青年論潮』 pp.5-6〕

以上の説明に続き、「たまり場学習の内容」として4つの内容が挙げられている。そのうち、「①共同学習の見直しと実践」、「②青年団の歴史学習と今日的意義の発見」、「③青年団の目的・性格の学習」の3つが「系統的な学習」として進められる。最後の「④よもやま話し、情報交換、経験交流学習」は、「「たまり場」学習は、以上のべた系統的な学習の前後と合間に本音と弱音を出しながら、よもやま話し、情報交換、経験交流学習を行い、やる気を起す団員を一人でも多く増やしていきます」というように位置づけられている〔同上 p.6〕。

上記①～③は青年団の組織活性化のためのものであり、④の「たまり場」の部分が付随的に見える。いずれ、これらの①～④の実践には、非常に力があるチューターや指導者が必要であったことがわかる。すなわち、かつて共同学習論の停滞の原因で挙げられた「指導性の欠如」の問題―同じ知識量・理解力しかない若者だけで読書会や議論を繰り返しても、「どんぐ

りの背比べ」状態で議論や実践が展開しないこと一が再び顕在化してくることは必然であったといえよう。

この時期には、都市公民館に倣って地方においても公民館施設のデラックス化・大規模化が進展した。その施設管理上の問題から、夜間に若者が気軽に公民館施設を使うことができなくなり、青年会館の自主建設や自治体への建設要望が行われ事例が少なくなかった¹⁸。このことは日本青年館再建運動と結びつけられ、都道府県・市町村レベルでの青年会館建設運動が展開する。

前掲の『青年団強化の手引 続ビジョンを求めて』では、青年会館に「青年のたまり場としての機能（現代版青年宿）」¹⁹があるとされ、青年会館は「たまり場」として位置づけられたのであった。すなわち、このときには青年団論においても「施設空間」と「たまり場」が一体化してとらえられていたといってもよい。

このように青年団と関わっても、日常に存在する「たまり場」という関係性に着目し、いかにそれを実践と結びつけていくのか、という50年代における共同学習論展開期の議論とは異なり、「たまり場」という関係性を無から生成すること、そのための施設空間の確保へと議論と実践が展開していったのである。

以上述べてきたように、80年代はじめまでには「たまり場」が青年団論において、キーワードとして確立していったのであるが、80年代、日青協による「たまり場学習」は全国的に根付かないままに停滞していったことが関係者より報告されている²⁰。ゆえに、80年代以降の青年団もしくは都市勤労青年サークルと「たまり場」とに関する報告や論考は、生活集団論展開期にモデルとなっていた、名古屋の事例に即するものに限定されていくのであった（【表1参照】）。

5. まとめと考察

本稿においては、以下のことを整理した。

「たまり場」が戦後社会教育、特に青年期教育と結びついて表出する時、そこには以下の視点が存在してきたといえる。まず、①日常に存在する「たまり場」を人と人との密接な関係性としてとらえ、肯定的な価値を与えるもの。次に、②①の「たまり場」を生成しようとするもの、そして③として、実際の施設空間に上記①の「たまり場」を生成させようとするもの、の3点に集約できる。概して①から②及び③へと議論と実践は推移してきたといえる。

①の視点にもとづく「たまり場」は、主に1950年代半ばまでの共同学習論の提唱期に小集団による話し合い学習の前提として大田堯らに「発見」された。そして、②の視点は、1970年代に那須野隆一によって提唱された「生活集団」論において重視された「たまり場」、さらにはそれ以後、日本青年団協議会が普及に努めた「たまり場学習」がそれに該当する。

③の視点に関して、施設空間と「たまり場」とを結びつける論考や報告が顕著に現れるのは、1970年代半ばからであるが、それには二つの流れがある。まずは国立市公民館の実践事例に基づく、平林正夫らによる都市公民館における「たまり場」論の展開である（③-a）。さらには青年団による青年会館建設運動に関わるものである（③-b）。この時期にもともと①の意味で関係性を表していた「たまり場」ということばが、具体的に施設建設と結びつけられていった。とくに③-bに関してみると、小規模な青年会館の建設においては、当事者からも「たまり場=施設」とする傾向が強かったといえる²¹。

上記の視点の流れを改めて整理すると、公民館論のトラックは常に①→③-aの視点であるといえる。まず公民館という施設空間ありき、が前提だからである。青年団論のトラックの場合は、青年会館建設運動や公民館青年室確保の運動等が展開したところでは、①→②→③-bという図式が描けるが、具体的な施設もし

くは空間の確保運動が展開しなかったところは①→②という図式で説明できよう。

とはいえ、1980年代以降、国立市公民館と名古屋の事例を除くと、各地の「たまり場」に関する動向はうかがい知られなくなり、青年会館の利用の停滞、公民館青年室の利用の停滞なども顕在化してくる。これは青年団の衰退と軌を一にしているといえよう。

筆者の見るところ、「たまり場」を標榜する活動がその後も継続した事例においては、大学教員や学生の継続的な関わり、また施設職員の深い関わりが認められる。すなわち、かつて共同学習でもその欠如が挙げられた、指導性やファシリテイトの重要性が改めて認識されるのである。

このように、「たまり場」という語は戦後社会教育において、若者の「日常」のありように着目することから「発見」された。かつて共同学習が「イエ・ムラ・ナカマの問題」を課題として、それを超えたナショナルなレベルでの政治や経済の問題へと行き着かないことが批判されたのである²²が、高度経済成長期を経て、若者の解決すべき課題が、再び「ナカマ」と個人そのもののありようへと立ち返ったときにキーワードとして浮き上がってきたとみることができよう。

ところで、この時代の「たまり場」も、また現在、主に在学青少年を対象として展開する「居場所」づくりにおける「居場所」という語も実は意味が不明瞭である。前者には集団内もしくは他者からの意味づけが強く、後者には個々人の意味づけにかかる意味合いが強い感があるが、いずれ主観に関わって意味合いが規定

されるあいまいな語である。これがとあるモデルの実態から離れ、実践のスローガンとして用いられるとき、その内実はさらに不明瞭となっていくことには留意せねばならないであろう。

6. 今後の課題

「たまり場」に関する実践報告においては、指導した研究者や職員、あるいはグループのリーダーからの報告が主であるため、以下の観点が欠けている。それは、①職員やリーダー以外のフォロワーであった、「たまり場」メンバーのイーミックな感覚の理解 ②「たまり場」で何が得られ、それがその後の人生の中にどのように転移されていったのか、という2点である。①②とも質的な研究、社会史的なアプローチとライフ・ヒストリー法やライフ・コース分析の視点が求められる²³。

特に公民館や社会教育施設における「たまり場」を標榜した実践は、職員と利用者グループという関係の存在、利用者の参画といった点において、現在展開する「居場所」づくりと共通する部分が少なくない。ゆえに1970年代半ば以降の「たまり場」の実践に関して、上記①②に着目して検討することは現行の「居場所」施設のありように関する議論を深化させることにもなる。

さらに生活史学習に代表されるように、対話を通した個人のふりかえりが「たまり場」において行われていたときは、それがどのような意識変容や行動の変化をもたらしていったかを問うことは、現在展開する意識変容を志向する成人教育論の成果に関する問い直しともなる。今後の取り組むべき課題としていきたい。

註

*1 安藤耕己「『集落青年会』の実相とその意味——戦後青年集団史研究の課題およびライフ・ヒストリー法の可能性——」（『教育学研究集録』（筑波大学大学院教育学研究科）第25集）、2001、同「昭和30年代の岩手県における『実践的学習』論の展開とその帰結——池野正明著『青年団体構造改革』〔1961〕を手がかりに——」（『岩手大学生涯学習教育研究センター年報』第2号）、2003、同「戦後青年団論における『若者組』像に関する考察——『青年団＝若者組母胎』論に着目して——」（『日本社会教育学会紀要』No.40）、2004a、同「成人の学習におけるライフ・ヒストリー——学習の意味を人生に即してみる——」（日本社会教育学会編『成人の学習（日本の社会教育48）』、東洋館出版社、2004b、同「若者の『たまり場』づくりにみる地域集会施設のあり方——岩手県

- 旧三陸町浦浜青年会館の事例を中心に——」（『日本公民館学会年報』創刊号）、2004c。
- *2 安藤前掲、2004c参照。
 - *3 平林正夫「『たまり場考』——社会教育における空間論的視点」（長浜功編『現代社会教育の課題と展望』明石書店）、1986。
 - *4 言説の流布・展開を見るに当たり、必ずしも専門に明るくない自治体職員や住民の目にも留まりやすく、書店での入手や図書館等での閲覧が容易な雑誌・書籍等を主に検討の対象とした。
 - *5 例えば、吉田昇「共同学習のすすめ方」（吉田昇・福尾武彦・碓井雅久・小川利夫『青年の学習活動』農山漁村文化協会）1959、木下春男「農村のサークル活動」（宮原誠一編『青年の学習』国土社）1960、堀恒一郎「働く青年の学習形態——個人の学習と集団の学習——」（宮原誠一編『青年の学習』国土社）、1961。
 - *6 長浜功『社会教育の思想と方法』大原新出版社、1980。
 - *7 しかし、そうしてみると1970年代半ば以降の「たまり場」論は、50年代の大田論とは断絶しているともみなすべきなのかもしれない。奥田泰弘「農村型公民館から都市型公民館へ、そして…」（小林文人・佐藤一子編著『世界の社会教育施設と公民館』エイデル研究所）、2001、p.284によると、1974年に発行された『新しい公民館像を求めて』——いわゆる三多摩テーゼ——は前年に既に主要部を提示していたという。ゆえに1973年から74年には「たまり場」という語が社会教育の最先端の場で語られ始めていたことを意味する。とすると、70年代半ば以降の「たまり場」の使用は、都市公民館での実践が契機であると見るべきであろうか。このことは今後、さらに検討する必要がある。
 - *8 なお、この時期には1969年に、当時の日青協会会長であった高橋成雄が「「青年宿」の現代版を」（『社会教育』1969年6月号）を寄稿している。これがこの時期に数少ない「たまり場」に関わる提言と見ることができる。また、ここには後の生活集団論における「若者宿」=「たまり場」とするイメージ化の萌芽が見られる（安藤2004a参照）。
 - *9 大橋健策「地域青年自由大学の創造」（宮川知彰他『青年の学力（講座日本の学力14）』、日本標準）、1979、pp.402-403。
 - *10 小川利夫「青年問題の現状と認識」（生活科学調査会編『青年教育（講座・日本の社会教育Ⅲ）』、医師薬出版株式会社）、1961、宮坂廣作「日本における青年運動」（生活科学調査会編『青年教育（講座・日本の社会教育Ⅲ）』、医師薬出版株式会社）、1961。
 - *11 引用は社会教育推進全国協議会編『社会教育・生涯学習ハンドブック 第7版』エイデル研究所、2005、p.164。
 - *12 奥田前掲、2001、pp.288-289。
 - *13 平林正夫「若者たちは「たまり場」をつくる——国立市公民館、コーヒーハウスの実践」（小林文人編『公民館の再発見 その新しい実践（社会教育実践双書④）』、国土社、1988、pp.86-87。
 - *14 例えば、平林正夫「公民館青年室の試み——青年期教育の施設と内容を高める視点——」（『月刊社会教育』1976年12月号、1976。
 - *15 安藤前掲、2004c参照。
 - *16 掛谷昇治「地域に生き地域を支えつづける青年団活動」（『月刊社会教育』1985年7月号）、1985、笹川孝一「青年の学習活動の基本をどこに求めるか」（『月刊社会教育』1980年6月号）、1985参照。
 - *17 このことに関しては、安藤前掲、2004aにおいて詳細に論じているので、参照されたい。
 - *18 長澤成次「地方自治の確立をめざして」（日本青年団協議会編・発行『地域青年運動50年史』、2001、安藤前掲、2004c参照。
 - *19 日本青年団協議会編・発行『青年団強化の手引き 続青年団のビジョンを求めて』、日本青年館、1978、p.37。
 - *20 例えば、掛谷前掲報告、姉崎洋一「暮らしと地域にねざした学びの展開」（日本青年団協議会編・発行『地域青年運動50年史』）、2001。
 - *21 日本青年館編・発行『財団法人日本青年館七十年史』、pp.1229-1235。
 - *22 藤岡貞彦「昭和30年代社会教育学学習理論の展開と帰結（上）」（『東京大学教育学部紀要』第10巻、1968。
 - *23 安藤前掲、2004b、参照。

表1：「たまり場」関係主要文献

No.	発表年	著者	書名・論文名・報告名	出典書籍・雑誌	内容等
1	1946	寺中 作雄	『公民館の建設』		「溜り場」としての戦後初期公民館像を提唱。
2	1961	大田 堯	「農村のサークル活動」		「たまり場」の発見。
3	1969	高橋 成雄	「『青年宿』の現代版を」	『社会教育』1969.6	コーヒーハウスをモデルとした現代版青年宿、「溜り場」のあり方を提唱。
4	1976	那須野隆一	「青年集団の学習活動—その今日的な視点と方法—」	『月刊社会教育』1976.2	生い立ち学習、たまり場、若者宿に言及。『青年団論』の骨子。
5	1976	庄司 誠 島崎 芳昭	「地域の文化をはぐくむ若者の“たまり場”～昭島・共同スナック「でく」1年のあゆみから～」（現代「若衆宿」の再創造・1）	『月刊社会教育』1976.2	共同スナック「でく」関係者による報告。
6		佐藤 一夫 平林 正夫	「“手づくり”コーヒーハウス—ひとり、ひとりを大切にできるたまり場を求めて—」（現代「若衆宿」の再創造・2）	『月刊社会教育』1976.2	公民館における「たまり場」の実践に関する報告。
7		青柳伊佐雄 ：報告	「青年の学習運動と社会教育」（第16回社会教育研究会の報告）	『月刊社会教育』1976.11	たまり場に関する事例報告をもとに協議した旨、報告される。
8		平林 正夫	「公民館青年室の試み」	『月刊社会教育』1976.12	「たまり場」の創造を謳う。
9		那須野隆一	『青年団論』日本青年館		生活集団論、生活史学習、たまり場の意義を解説。
10	1978	日本青年団 協議会	『青年論潮』創刊号		背表紙には「たまり場学習をすすめよう」とあり。『たまり場学習』のテキストの位置か。創刊号のみで休刊。
11		日本青年団 協議会	「青年団強化の手引き 続ビジョンを求めて」		那須野論を踏まえつつ、従来の青年団論を再解釈。テキストとして用いられる。
12	1979	大橋 健策	「地域青年自由大学の創造」	『青年の学力』（講座日本の学力14）	若干の「たまり場」論の整理あり。
13	1979	富田 昌宏	「経験を交流し、青年会館論の創造を」（青年団ベースキャンプものがり）	『青年』1979.8	「たまり場」としての青年会館論を展開。
14	1980	水元 修	「都市青年活動のたまり場を」（一言提言）	『青年』1980.1	施設としての「たまり場」の必要性を訴える。
15		千野 陽一	「80年代の展望 学習活動の発展のために」（特集 青年団運動80年代の期待）	『青年』1980.1	1973年より日青協で「たまり場学習推進運動」が展開していたことが明示されている。
16		小松 光一	「よい青年団にはたまり場学習がある」（私の青年団改造論）	『青年』1980.3	青年研究会の感想。各県団ごとに「たまり場」学習を行っていることがわかる。
17		長浜 功	「民衆の広場とたまり場」	長浜功『社会教育の思想と方法』大原新出版社	大田の「たまり場」論の評価。
18		那須野隆一	「都市青年と生活史学習—都市青年における青年団的青年集団の組織化の方向を探る—」	『青年』1981.9、1982.2	日青協学習推進活動委員会報告。
19		千野 洋一	「地域をつくる青年の学習と運動—地域青年団を中心に—」	『月刊社会教育』1981.9	「たまり場」学習、生い立ち学習の評価。
20		渡辺 幹雄 ：報告	「動き出した青年たち—大分県緒方町」	『月刊社会教育』1981.9	「たまり場」現代の「若衆宿」づくりを報告。
21	1984	加藤 伸治 西浦 則正 ：報告	「地域に帰る青年—都市における青年の組織化をどう図ってきたか」	『月刊社会教育』1984.5	名古屋市熱田区における「たまり場」活動、生活史学習の報告有り。
22		蟹江 昇 ：報告	「名古屋市における“宿泊型青年の家”建設要求運動の歩みと教訓—名サ連、その後の10年—」	『月刊社会教育』1984.8	生活史学習とたまり場学習の成果として、青年の家建設を報告。
23	1985	斎藤 秀平	「青年教育の課題と展望—たまり場から地域実践へ—」	『月刊社会教育』1985.1	「たまり場」だけに留まらず、その先の地域実践を提起。
24		平林 正夫	「青年が地域に目覚める過程」	『月刊社会教育』1985.1	コーヒーハウスの実践分析。
25		石川 稔	「青年教室から地域のなかへ—障害者青年学級にとりくんで—」	『月刊社会教育』1985.1	東京渋谷区恵比寿社会教育館における「たまり場」の実践に言及。
26		掛谷 昇治	「地域に生き地域を支えつづける青年団活動—青研集会30年の到達点—」	『月刊社会教育』1985.7	青年団における「たまり場学習」がすぐに停滞化したことを言及。
27	1985	日本社会教育学会	『現代社会と青年教育』（日本の社会教育第29集）		共同学習論後、そして『青年団論』以降の青年期教育を総括。
28	1986	平林 正夫	「「たまり場考」—社会教育における空間論的視点」	長浜功編『現代社会教育の課題と展望』明石書店	公民館施設における「たまり場」の思想的系譜を追い、「たまり場」の生成の方法的検討も行う。
29	1988	平林 正夫	「若者たちは“たまり場”をつくる—国立市公民館、コーヒーハウスの実践」	小林文人編『公民館の再発見』国土社	実践報告。
30	1990	大村 恵	「青年のたまり場論①」	『月刊社会教育』1990.9	名古屋市の「たまり場」活動の概括。
31		大村 恵	「青年のたまり場論②」	『月刊社会教育』1990.10	名古屋市の「たまり場」活動の概括。
32		宮田 和彦	「青年のたまり場論③」	『月刊社会教育』1990.11	瑞穂青年の家団体連絡協議会による「たまり場」の実践報告。
33		宮田 和彦	「青年のたまり場論④」	『月刊社会教育』1990.12	生活史学習の報告。
34	1991	石黒 康子	「青年のたまり場論⑤」	『月刊社会教育』1991.1	名サ連による「女性のたまり場」の報告。
35		加藤 伸治	「青年のたまり場論⑥」	『月刊社会教育』1991.2	はたや青年会における「たまり場」活動の報告。
36		姉崎 洋一	「青年のたまり場論⑦」	『月刊社会教育』1991.3	6回の総括。
37	1996	平林 正夫	「現代たまり場論考…若者はどこに居場所を求めているのか」	『月刊社会教育』1996.3	青年の「たまり場」論から子ども・若者の「居場所」論への過渡的文章。
38	2005	平林 正夫 山崎 功 小林 繁	「座談会・居場所づくりの原点を探る」（特集・居場所づくりの構想）	『月刊社会教育』2005.1	「たまり場」＝「居場所」の認識。施設空間論として。